

### <講演>日本文学研究をめぐっての回想

小田切, 秀雄 / ODAGIRI, Hideo

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

18

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

1987-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019485>

## 日本文学研究をめぐっての回想

小田切 秀 雄

今いろいろとお話が出ましたが、私はあと二月くらいで満七〇歳になります。文芸家協会では、七〇歳になる者にカナダの膝かけ毛布をくれることになっていて、毎年、文芸家協会の「ニュース」で、ああ、今年はある人との七〇になったのかと思って見ていたのですが、ついに自分の番になってしまいました。けれども私は、文芸家協会の集まりにはこれまで出たことがない。一九四〇年代に会員になり、舟橋聖一が生きていたころ、もう少し文芸家協会に出てきて働いてくれなきゃ困るなどとたびたび言われながら、逃げまわっていて全然働きませんでした。それで、毛布をもらうときくらいは出なければ申し訳ないだろうと思って、このあいだ出席したら、今年二二名の七〇歳になった会員がいて、しかも実際に来ていたのはたった七名でした。

去年、だれか女性作家が、七〇だなんて祝われるのはいやなこと、といって名前を出すのにも抵抗したそうです。女性は特に、ということもあるが、女性に限らずそういうふうに七〇歳になったなどと

いうこと自体がいやだし、お祝いをもって引退するみたいな感じになるのがいやだ、ということを出てこない人が多くなっているそうです。それを知らずに私は出て行って、しまったと思ったのでした。ところが協会の事務局は、七〇歳になった挨拶を皆の前でしてほしいというので、どうせ出てきてしまったのだから、と思ってそれを引受けたら、こんどは「東京新聞」の石田さんがその挨拶を書けというのです。

そこで同紙に、このあいだ「人、七〇に至るや」という題名で短い文章を書きました。「人、七〇に至るや」という題名は、もちろんチェンロン謙容という人の書いた「人、中年に至るや」という小説の題名から、ちょっと拝借したわけです。この「人、中年に至るや」という小説には、いろいろな翻訳がありますが、さいきん中公文庫で林芳リンガという人の翻訳ができました。たいへん読みやすい、いい翻訳だと思います。作者の謙容という人は、文化大革命のあとに出てきた作家ですから、新人作家なんです。もう四〇歳を超えている。私は

北京でちょっと会いましたが、地味な感じの生活者のなひとで知的なものをひそめていてという感じでした。

文化大革命中に、才ある若い作家はめげかけたところですが、つぶされてしまったのです。作家だけでなく、科学者も、そのほかのいろいろな芸術家や技術者も、文化大革命のときに若い芽は摘まれ一般的にも停止した。文化大革命は、最初は、社会主義革命がソ連でのような墮落した形態におちいってゆくのを防ぐための、つまり社会主義そのものを革新するための運動という面が前面に出ていて、私などは、それに非常に期待をよせていたのですが、さて、やってゆくうちにそれが全的な文化破壊になってしまった。その一つの場合として、大学や研究所は破壊され、学者とか研究者というのは、約一〇年くらいに関しては全部だめになってしまった。だから今、学者や作家の新人というと、みな四〇歳代くらいになってから最近出てきたという人たちになるのです。恐ろしい話です。

謙容という人も新人作家なんですが、実際は四〇歳をこえています。「人、中年に至るや」は、眼科の一人の女医のことを書いていて、それを読んだ日本の眼科医は、中国の医学がずいぶん進んでいることに感心していましたが、小説としてなかなか面白い、いい作品です。中公文庫の薄いもので簡単に読めますから、ぜひ読んでください。中年に至っても、中国ではまだ、社会的には非常に貧しくて個人生活にすこしのゆとりも出てこない、医者は医者なりにものすごい労働で、世に報いられない生活をしている。医者として人間としての良心は、主人公を一層はげしい労苦に追いこんでしまう。労働条件が改善され、いい活動ができるようになっていいはずなの

に、という人間的な訴えが小説の表現のなかから伝わってくるような作品です。これが、この作品のモチーフの一つなのです。今では、中国はかなり改善され、こんなにひどい状態ではなくなったということを作作者自身が巻末に書きそえていますし、このまえ私が中国へ行ったときにもかなり良くなっているという印象はありましたが、それでもまだまだなかなかでしょう。

ところで私は、その「人、中年に至るや」という題名を借りて、「人、七〇に至るや」という文章を書いたのですが、しかし、やはりすこし悲しかったですね。自分ではそんな年になるつもりは、まったくなくて、(笑い)まだまだへんに若いつもりでいました。また、自分は老成できない性分だし、老成はしない、と考えていました。あいつはいつまでたっても老成できないと言われてきていて、それはまさにそのとおりで、しかし、老成できなくて結構なのだ、私は私のやり方で行く、と前から思っているのです。

こうして、老成できないまままで年齢だけはいつのか七〇歳になってしまった。七〇歳になって、さて、これからどうするかといえば、別になにか変わったことをするというのもない。さっき佐々木基一が言ったように、挫折を重ねて現在に至った、そういう人間としてのひろいベースペクティブのなかでわれわれの失敗などを若い人たちに学んでほしいということは、たしかにそのとおりです。しかし、そういう年齢の者という面だけでなく若い人たちと対等に同僚として活動するという面、つまり現役という面がなくなったわけではない。文学の世界というのは、七〇歳になろうが八〇歳になろうが、あるいは五〇歳であろうが一八歳

であろうが、すべて同じ出発点に立っている。七〇歳になったから  
おてやわらかに、というわけにはゆかない世界なのです。文学の世  
界では、いかなる年齢であろうと全部、出発点は同じです。年齢に  
よって、いくらかでも容赦されたり甘やかされたりすることはあり  
ません。実際には多少ありますけれども、基本的な点では年齢によ  
る評価の違いというものは、まったくありません。物書きとしては、  
それを覚悟しておかなくてはならない。ある年齢になったから、も  
ういいんだ、というわけにはゆかないのです。私自身としても、い  
つも二〇代、三〇代、そういうときとまったく同じつもりでやって  
いきたいと考えます。年は取りたくないものだ、などといわれよう  
とすこしもかまわずにやってゆきたいと思っています。

七〇歳になったために見えてくるもの——これもさきほど佐々木  
基一が言ったことですが、七〇歳になれば、いろいろに長いあいだ  
積み重ねてきた経験の結果として見えるようになった、そういうも  
のがいくらかはあるものです。鈍磨したところもあろうが、その見  
えてくるようになったもののほうが今後に活かされてくれば、それ  
は若い人たちと一緒に活動する根拠の一つになるでしょう。

このごろ日本の社会はひどい状態になってきていて、今日もここ  
へくるとき総選挙の候補者がほとんど狂せんばかりにラウドスピー  
カーで金切り声をあげている。与謝野馨なんて、あれは与謝野晶子  
の孫でしょう？ 私は与謝野晶子は尊敬しているのですが、その孫  
だかなんだかはキーキー声でラウドスピーカーで叫びながら、も  
うギリギリです、なんとかよろしくお願いいたします”とやってい  
る。こういう末端だか先端だかをもふくめての現在の支配体制の政

治の入り組んだ文脈が全体としてひどくなっている。

最近のテレビを見ていますと、中曽根さんがあっちこっちへ行っ  
てもっともらしいことをしゃべる姿が、実にしばしば出てくる。その  
ひとつひとつはもっともらしいのだが、それらの間に大きな矛盾が  
ある。このことを新聞はとにかく具体的に批判しているがテレビで  
は本人による弁明や説得だけがばらまかれている。もっとも、新聞  
といってもたとえば「読売」は編集局長が中曽根系と見られる人で、  
このことは『週刊文春』などがバラしている。これは別だけれども、  
「朝日」や「毎日」を見てみると、中曽根の言っていることがいか  
に嘘やペテンであるかが具体的に明らかにされています。もっとつ  
つこんで書く必要があるとは思いますが、とにかくこっちはこういう  
ことを言っているのに、あっちではこんなくいちがったことを言っ  
ていると、嘘やペテンを次々とバラしています。自民党政治の悪辣  
ぶりはかなり新聞紙上でバラされているのです。ところがテレビで  
は、かれが福岡へ行って弁明したり、ほかの地で格好いいことを言  
ったりしている、そのところばかりが出てくる。だから、テレビが  
支配している時代というものは非常に危険で、一つ一つの事柄を長  
い文脈において捉えるということが不可能になり、格好のいい場面  
だけを見て、それで判断する。こういうふうにしてすべてについて、そ  
の場その場の判断だけが支配するという短絡がひろがっている。こ  
れだけでなく、日本は今、経済大国であるにかかわらず思想の面  
ではおよそ貧困な国です。文学の面でも、まあ、世界全体が現在では  
だめですけれども、日本もはなはだ具合がわるい状態になっている。  
こういう現在のよような社会状況のなかで、それじゃ、どうやって

いったらいいのかという際に、一般的な問題と同時に、自分は何かできるか、何をせねばならぬか、ということを考えないわけにはゆかない。そしてそのさいに、自分はこれまで何をしてきたか、ということがでてくる。今日は、日本文学研究との関連でわたしの経験してきたことをいろいろ話してほしい、ということなので、自分がこれまで何をしてきたかという回想とあわせてそういうことを述べようと思います。もちろん、自分自身の生涯というのはい体なんだったんだろうか、などということを考えるのは、まだ早過ぎる、人生のバランスシートを出すなんていうのは、まだ先の話です。ところが、たとえば『すばる』に「私の見た昭和の思想と文学の五十年」というのを書いてみると、もうそんなものを書く年齢になってしまったのか、というひとがでてくる。二〇回の約束で書き始めたら、だんだんにのびてついに五〇回までということになり、来年の六月まで書き続けますが、こんなにえんえんと続くと、もう回想録を書くようになったらお終いだ、みたいなことがあるでしょう。しかしそれはわたしのそれを読まないできめつけているので、自分としては単なる回想録ではなく、回想録のかたちを借りた批評、評論あるいはプロテストとして書いているのです。それはだれかがわかってくれるだろう、読者の反応が多少多いということのなかにはそういうひとがいるのだろう、とは思っているのですが、これ以外にいろいろと書くということがまだあまりできないということもありま

す。私はおとし、さきおとしと二度ほど死にかかりました。二度目は肺壁が弱くなってしまつて次々と破れ、もう年貢の納めどきかと思つたのが、幸い肺壁を強くする薬が新しくつくりだされ、そ

れを見つけてきた医師の力でやっと生き延びることができました。しかし、今でも、肺壁がいつ破れるかわからない、無理をしてはだめだとおどかされています。自分では不本意ですけども、あまり活動ができなくなった。それにもかかわらず私としては、やはり若い人たちと同じ出発点に立っているつもりで、すこしのハンディキヤップもなしで進んでゆきたい。いつまでも年が取れないで老成できないというのを、逆にたてまえとしてやっていきたいと思つています。

さて若いころからのことを一つ一つ話しているときりがなく、多くのことは『すばる』の連載に書いておきましたから、ここではややべつの面から申しませう。私が最初に強い影響を受けた日本近代文学研究者の片岡良一という人のことから申します。

この人は日本の近代文学研究を、資料集め、あるいは回顧的な趣味というところから抜け出させて、文学的な研究・ほり下げにおいてとらえる、ということに初めて成功した人です。片岡さんが出てから、湯地孝とか塩田良平とかいろいろな人があわせて活動するようになり、それらの人々にも日本近代文学を文学として研究しようとした面がありましたけれども、片岡さんがやはり一番見事だった。片岡さんは若いころ、大正の半ばから『新潮』——今も続いている『新潮』です——とか、自然主義らしい重要な文学雑誌の一つでもあった『文章世界』などに文芸評論を書き始めた。ところが文芸評論の新人として活動していても、それだけではとても暮しが成り立たない。いまでも批評家として暮しをたてるなどということとは日本ではほとんど不可能で、批評家で教師を兼ねていない人

はほとんどいない、というのが実際です。もしも批評だけで暮しをたてようとする、ジャーナリズムの下働きとして本当にひどい量のつまらぬ仕事をしなければならぬ。多少は自由に、遠慮なしにものをいおうと思えば、生活の地盤を批評の収入だけに置くことはできない。結局、教師を兼ねるより仕方がない。昭和十年前後になって森山啓という批評家が、一時、批評の最前線に躍り出たことがある。そのときにかれば、月に四〇〇枚書かなければ家族とともに食ってゆくことはできない、と書いていて私は小さな衝撃を受けた。これでは批評家などになつたらたいへんな目にあう、と思いましたがね。そしてまた、小林秀雄でさえ、戦後になつても、家を借りにゆくとときは明治大学教授という名刺を持ってゆかなければ相手にされない、なにかに書いていました。

片岡良一さんの場合は大正の半ばころですから、ましてや批評家などでは食えない。広津和郎の「初期文芸評論」という本に収められた文章が次々に発表されていたころで、この本は大正期の評論としては一番すぐれたものですが、かれは暮しのためには小説を書くことに中心を移さざるをえませんでした。片岡さんの評論は広津に最も近く、いまでも読みごたえがあるのですが、広津のように作家に転ずることはできなかったようです。大正のはじめ、片上伸の「生の要求と文学」という評論集が注目されましたが、このひとは早稲田の教師を兼ねており、片岡さんもまず古典の学者になった。最初の本は『井原西鶴』でした。東大での先生だった藤村作というのが非常に偉い人でした。戦時中は英語教育廃止論などというひどいことを言い散らした人で、そういう点でははなはだよくないが、一面

では非常にすぐれた人で、婿の近藤忠義という左翼の学者をかばい通したし、片岡さんが優秀だということを若いころから見抜いていて、進歩的傾向のために次々と追われることになった片岡さんを実によく守った。かれは、片岡さんを中心に東大に近代文学の講座を作るということを大正末年から考えていたようです。どこの大学も、まだ近代文学の講座などということは夢にも考えてなかった時代です。

いや、考えていたらしいというのはつまり私の推定だということですが、しかし、若い片岡さんが藤村さんの管轄する世界で、どういう仕事をしたかをずっと見てきますと——私は『片岡良一著作集』を一一巻全部に解説をつけて中央公論社から出しました。そのときにずいぶん調べたのですが、のちに近代文学の講座を開くにふさわしいようなテーマと分量を割りあてられて片岡さんは、それにこたえるだけのものを書くのに奮闘していました。藤村さんがそれを割りあてたのです。片岡さんの先生の藤村作さんという人は東大国文学科の主任教授で、戦前の東大国文学の主任というと全国の大学と旧制高校との国語・国文学の人事の総元締めだった。藤村はとくにその威令がほぼ全国にわたっておこなわれていた。

この人事ということに関連してここでいっておきたいことがあります。つい最近まで近代文学に関しては文学博士などというものをバカにし、文学博士を狙うなどというやつは沙汰の限りだというふうには私は思っていたし、言いもしましたが、近代ではだいたいそう考える人が少なくなかった。学生も、文学博士になろうなどと思うのは私のところへは入ってこなかった。ところが、近年、九州に行つてみ

て驚いたのは、九州あたりではもう大学教師に採用されるには学位を持っていなければだめだ、という空気が強くなってきている。現在の大学教師は学位を持っていなくてもいいが、これから大学教師に採るのは学位を持っていることが条件になる、というようなことにだいたいなってきた。それだったら、法政の日本文学科からはここのとこ優秀なのが次々と出ているのだから、それらのひとが学位をもたぬために大学教員になれぬというのでは困る、学位にたいするブレイキをはずし、むしろ大いにすすめることにしたい、と私は考えるようになりました。実際、こんな大学は今のところまずないだろうと思うほどにすぐれた人材が輩出していて、私はたいへんうれいのです。この大学を去るにあたって非常に楽しい思いの一つは、ここから実に多くの才能が出た、ということ。その代表的な一人がさきほどこの壇に立った立石君ですが、今年の学生のなかからもたとえば黒沢亜里子君は「女の首」という高村光太郎と千恵子の問題をオリジナルな角度で扱ったいい本をドメス出版から出し、広く評価されています。まだ彼女は私の大学院のドクターコースの学生です。こういうふうには、優秀なのが次々に出ているのに学位がなければ大学の教師になれないというのはどうにもならない。それに各大学が閉鎖的で、なるべくよその大学の学者は入れないようになっているところが多い。敗戦直後から全共闘の時代にかけて大学教員の公募が一般化したいへん良かったんですが、いまでは、公募をはずすというのさきから公募はする、しかし実際にはとくに決まっているというのが多くて、なかなか法政の出身者をほかの大学に採ってもらおうのがむづかしい。いつも、それで苦勞するわ

けです。就職の世話をするのは責任の範囲外だといっても、優秀な人はどこかの大学等へ入れたいと思います。

それで私は、方針を一八〇度転換して、法政出身の文学博士をたくさんつくりたい、と思うようになりました。ほかの先生方からはちょっと皮肉に、今さら急にそう言われてもこちらの頭の切り換えがむづかしいなどとかからかわれるのですが、もちろん反対ではないので、優秀な文学博士を続々と作ることにしました。すでにこの三月に任展慧君（にんてんけい）という女性の、在日朝鮮人文学史の徹底的に綿密な研究が文学博士の選考を通過しました。近く本になります。それから、引き続き数日中に博士号授与式がおこなわれるのは仲程昌徳君の「沖縄近代詩の研究」。これは選考が行われる前に単行本になって本屋さんに出ています。今、こういう二人が出てきたわけですけども、このほかにも続々と出る予定です。そういう人たちが——そういう人たちだけじゃありませんけれども、次々といろいろな場所で活動を広げてゆくことを期待しているわけなんです。

片岡さんの話に戻りましょう。片岡さんは大正七、八年ごろ新進批評家として認められ、なかなかいい批評をたくさん書いています。そのうちのかなりの部分はさきの「片岡良一著作集」の第一巻に入れておきました。あれは全集ではないので、全部は収められなかったのですが、それらはいずれもよく作品を読みこんだ上での鋭い批評になっている。だから、批評家としてずっと伸びてゆくことができた良かったんですが、それでは暮らしができない。しかもかれは学生結婚をして、下宿の娘さんといっしょになってしまった。結局かれは古典の学者になり、藤村さんの世話で『井原西鶴』

という最初の本を出した。卒業後ほんの短い期間だけ春日部の中学教師をやって、それから旧制姫路高校の教授になる。そこで落ち着いていれば無事だったのですが、信州の木崎で毎年夏おこなわれた国文学講座に招かれ、近代・現代の文学史について講義しているなかでプロレタリア文学の持っている文学としての面白さや意味合いについて触れた。そしたら、赤い文学をほめるとはなにごとだ、というので非常にうるさいことになり、そのほかのこともあって、結局、姫路高校にいられなくなりました。ところが、先生の藤村さんは、府立高校——今の都立大ですが、その府立高校に新しい椅子を見つけてくれました。なお藤村さんが中心になって編んだ岩波の最初の「講座日本文学」で片岡さんは文学史概説の明治時代を担当することになる。文学史を担当するということは、基礎的な中心的存在とされたということです。ただし、その文学史のなかで「小説神髓」の「神」を真理の「真」に書き違えて、本ができるまで気づかず、本人はほんとうにくさっていましたが、しかしこの文学史はたいへんにいいもので、それを拡充したのが、中央公論社から出た「日本近代文学史の展望」という本です。

そのころ、府立高校はできたばかりで、まだ教師が全体として少ないものだから、高等部の教授だった片岡先生が中学部のほうへ一年間臨時に教えにきました。そのときに片岡さんの講義にすっかり感心し、やがては惚れこんでしまって、一生あとをくつついて歩くことになったのが中学二年生の私なんです。この片岡さんを通して文学のおもしろさに目を開かれました。もっともその前に、出版革命の時代が来ていたということがあり、これが文学作品をたいへん

にしたしみ易くしていた、という客観状況があります。円本が盛んに流布したということがありまして、一冊一円の厚い「講談全集」を読んだし、やがては一円の「漱石全集」が二〇冊、総ルビでわかりやすいのが出ました。私は小学校の六年生になっていましたが、それを母親にねだったら買ってくれて、それは読んだら面白かった。

「こころ」だとか「道草」とかになりますと、小学生にはだいぶむつかしくなりましたし、「吾輩は猫である」にしたって最初のほうはよくわかって面白かったけれども、途中から明治の竹林の七賢人が出てきて、批評的「清談」をする、明治社会からは一步距離を置いたこれらの知的批判者たちが、猫を置き去りにして勝手な熱をふくことになるでしょう。その議論も面白いのだけれど、小学生向きではない。その時分は飛ばして読みました。中学一年のときにドストエフスキイの「カラマゾフの兄弟」を読んで、イワンの大審問官の話が出てくると飛ばして読んだように、です。それでも、とにかく一応は「漱石全集」の小説は全部読んだ。そのころには、また、岩波文庫だけでなく改造文庫というのが出ました。これは一〇〇ページ一〇銭なんです。岩波文庫が一〇〇ページ二〇銭だったから、それよりさらに安く、中学生の小遣いで実に買い易かった。出版革命というのは偉いもので、つまり、それまで小説集というものは、だいたい二円五〇銭とか三円払わなければ買えなかった。それが一冊一円になり、しかも単行本五冊分くらいが入ってしまう。それから文庫本ですが、国語教科書に出てくる有名な石川啄木の「一握の砂」と「悲しき玩具」とを改造文庫なら二〇銭で買える、「北村透谷選集」も一〇銭で買った。ただし、この透谷はルビ付きだった

のに実に内容がむつかしくて、一年生のときに買いはしたけれどもついに読めませんでした。今でもそれは持っています。十銭でしたから、読めないものでも買ったのです。

そういう多少の下地のあるところで、中学二年になったときに片岡良一が教室へきて、ふつうの国語教師のやり方とはまったく違った勝手放題なやり方で国語を教えるようになる。当時のカリキュラムを無視して、徹底的にくわしくことばと観念のひとつひとつを検討して進む、というやり方でした。それがとても面白くて私のなかに灼きついてしまった。だから私は法政を卒業してから最初に、横須賀中学の教師になった時に片岡さんと同じ方法でやりましたが、それは非常によかったらしくて、昭和一六年にほんの半年教えただけの横須賀中学の生徒たちが、今でもなんの言ってきませんし、同窓会があると必ずよび出され、時々出かけます。私の場合を申しますと、「蘭学事始」の一節が教科書に引かれていた、その五、六頁ほどのものを、三カ月くらいかけて綿密にやっただけです。ことばの一つ一つをほかのことばとつぎ合わせながら考えさせてゆき、そのちがいのなから国語の生命のようなものを伝えるとともに、時代の闇黒をきりひらく科学者、医者、努力をひとつひとつ明らかにするというわけです。そのせいかわからなければ、そのクラスから六人も医者が出ています。(笑) 当時は、軍国主義への抵抗の一つとして医者になるというやり方がありました。私は、軍国の街横須賀で軍国主義に露骨に反対はできないけれども、とにかくそういうものはだめだ、科学性なり人間性なりというものが大切なのだ、ということをはっきりさせるために「蘭学事始」を実に熱心

に、片岡さんのやり方でやっただけです。それは強烈な印象だったらしくて、今でもそのクラス全体と付き合いがあるので。

もともと私は中学二年のときその片岡さんのやり方にほんとうにびっくりして、国語とか文学とかというものはこんなに面白いものなのだろうかと思ったのですが、その片岡さんは、かれの先生の藤村さんの編んだ教科書を使って、そのなかの二つ三つを徹底的に詳しくやっただけでした。私は、それ以来、旧制中学の国語教科書を編むということに特別な意味をみとめてきたのですが、近年たまたま教育出版社というところが、現代文の高校教科書を編んでほしいと言ってきたので、若い人に協力してもらって「現代文」という教科書を作った。中岡哲郎や高橋和己や岡部伊都子や植谷雄高らの文章と武田泰淳や佐多稲子や野坂昭如やの小説を入れて、ずいぶん自由なものを作ったのですが、それが現在十二万何千部も全国の高校上級生の手にわたって使われています。もっと増えるといいと思っていますが、しかし私はとてもうれしい。私の編んだ教科書が、そういうふうに教師と若い人たちに使われて、とてもうれしいのです。

しかしこれは最近の話です。いまから半世紀以上前になりますが、私は片岡先生の編んだ教科書で文学に目が開かれると同時に、熱心に近代文学を読みはじめました。当時の円本の「現代日本文学全集」(改造社)と「明治大正文学全集」(春陽堂)とのおかげをずいぶん蒙りました。とにかく、そういうものはどんな図書館に行ってもあるし、古本屋に行くと四〇銭から五〇銭くらいで一冊買えましたから。それを、せっせと、ほとんど学業を放擲して読みました。

それまでは全クラスでトップだったのが、その結果たちまちガタガタと落ちて、旧制高校の部に進むときにはかろうじて及第というところになりました。文学少年になってしまったわけで、中学の二年、三年のころにはたとえば芸者をめぐるあらゆる習俗や用語について、ことごとく知っていました。カゲなどというのものもなんとなくわかっていました。ただ実際はまだまじめな中学生で、そういう場所や人物とはなんの関係もないわけですから、観念としてだけ知っていたわけで、実際のことにはなにも知っていない。戦後になって竹内好とおしゃべりをしているときに、そのことを話をしたら、いや、僕もそうなんだ、僕も中学生のときに芸者についてあらゆることを知っていた、しかし実物の芸者や芸者の世界のことはなにも知らなかった、と言っていました。竹内も私も、大正文学の読み過ぎなものでした。とにかく、それほど濫読したんです。そのなかで白樺派のヒューマニズム、その人道主義的な理想に、だんだん心が強く引きつけられるようになった。それ以前の自然主義の持っていた実人生の重みについての実感的認識などというものよりも、白樺派にまず引きつけられたのでした。

有島武郎・志賀直哉・武者小路実篤から千家元麿・木下利玄——詩の千家から短歌の木下まで、それこそ片っ端から読みました。そして特に有島武郎が晩年、しだいに社会主義に接近してゆくのを、私はまことにもっともだと見るようになりました。そのとき、たまに小林多喜二という新人作家の「一九二八年三月十五日」という小説が、かつてたいへん評判になっていたということを聞いたが、どこに行っても、もう売っていない。出た当時は、掲載された『戦

旗』は発売禁止でもあちこちで手に入れることができたというが、3、4年後の私のころにはどこにもない。で、あるとき片岡先生に、「一九二八年三月十五日」という小説を読みたいのですが、どこへ行っても買えませんという話をした。そしたら先生は、しばらく僕の顔を見ていたけれども、じゃあ君、あまり表立ってというわけにはいかないけれども僕のを貸そうか、といって彼の座っている後ろの押し入れの奥をゴソゴソさがし、そののっている昭和三年の十一月号と十二月号の『戦旗』を貸してくれました。

私は読んで一晩眠れませんでした。この社会の仕組みというものは、一体どうなっているのだ、こんなことが平気でまかり通っているなんて。私にはたいへんショックな小説でした。それからまた、天皇の警察のひどい拷問にも屈しない、ものすごく強固な信念・意志を持って生きている人間がいる、これは一体なんだろう、ということも心にきざまれました。私たちはそれまで忠君愛国教育をさんざんたたきこまれてきました。教育勅語などというものを小学校一年生のときから絶対的なありがたいものとしてたたきこまれてきていたので、そういう教育を受けた人間から言うと、天皇制権力というものに対して、まったく屈伏しないで自己をたらぬく人たちが存在しているということには、ほんとうに驚いたのです。そういうことなどがきっかけになって、社会科学の本やプロレタリア文学の作品を、それらがまさにもう下火になりはじめていた昭和七、八年から読みはじめました。日本のプロレタリア文学のピークは昭和三年から六年です。七年になるともう下り坂になってゆく。私が読み始めたのは下り坂がはじまったときでした。『ナップ』の終刊

号は昭和六年の十一月号で、その号には蔵原惟人の「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争」と一緒に勝本清一郎の蔵原批判「ベルリンからの緊急討論」が載っているのですが、それがまだ新本屋に、少し古くなったまま出ていたんです。昭和七年の一月ごろで、私が買ったプロレタリア文学の雑誌の最初のものです。

つまり、蔵原提案によってプロレタリア文化・文学の運動のコップへの再編成がおこなわれ、ほんのひととき盛んな形になるが、たちまち、一斉に狙い撃ちされて組織は全部が潰されてしまう。もともと、ナップをコップという組織に編み直し、文化・文学運動の力の全部を集中して、潰れかかった共産党の補強をしようとしたもので、これを警視庁のほうから言えば、全部が大っぴらに揃ってくれたから一斉に検挙するのが非常にやりやすくなった。そしてその通りに全部、根こそぎやられました。そのあとプロレタリア文化運動系は、どの運動も次々と追い詰められ、やがて昭和九年の初めごろまでには組織の形態をもったプロレタリア文化・文学運動はすべて潰れてしまう、ということになります。これでプロレタリア文学がすべて消え去ったわけではなく、もっとゆるやかな形での文学雑誌中心の動向としてはしばらく続きますが、やがてはそういうものをふくめて進歩的ないっさいの文学運動は潰されてしまう。

それから、私は在学していた旧制の東京府立高校で学生運動に参加するのですが、すぐにつかまって留置場にぶちこまれてしまうということがありました。一般に学生運動も、もうだいたい終わりのころで、まだ京大では滝川事件をめぐる最後の波の高まりがあり、野間宏の小説などには描かれています。東京では、そういう高ま

りもありませんでした。それ以前は、東京をはじめとして全国の旧制高校と大学のほとんどすべてで学生闘争がおこなわれ、いろいろな人が捕まったり追放されたりしていたのですが、それはもう東京ではほとんど見られなくなって、散発的な小さな運動までがすべて摘みとられてしまう、という状態が進行しはじめていたわけです。しかし、私がプロレタリア文学の読者から学生闘争にすこし進み出たのは、まだ末期の学生運動があったころでした。昭和七年ごろのある日、府立高校の理科の学生で、のちに日本評論社の社長になる鈴木三男吉という知らない学生が、そっと私を呼ぶので行って見たら、君、こういうのを読んだことがある？　と言って当時の共産党が合法面を出していた「無産者新聞」をくれて、読んでほしい、そして寄付（いまならカンパということでしょう）してくれませんか、また次の号もあげる、といました。おもしろそうな新聞でした。この新聞のおもしろさについては、宮本百合子の「二つの庭」に、作者の百合子さんが若いころ——まだソ連に留学する前の昭和二年ごろ、ちょうど芥川龍之介が死んだときのショックを書いたところの前後に、そのころは街頭でも売っていた「無産者新聞」を買ってきて、ふつうの新聞と比較して読んで感心するところが出てきます。非常に生き生きと、そういう場面を描いています。その「無産者新聞」を、僕は鈴木三男吉から受け取ったのがきっかけになって鈴木三男吉の共産青年同盟系のグループに引き込まれ、やがて短い期間つかまり停学をくったりした。中学部の最上級の時でした。

それから高等科になりました。制帽に白線をつけるようになります。なんだ、こんな白線なんかつけてと一方で思いながら、しかしまん

ざらでもなく、そういう根性というのは、なかなかとりにくいものですね。(笑)この白線というのは——川端康成の「伊豆の踊子」の主人公は白線をつけた旧制高校生ですが、戦前の旧制高校生はほんとうのエリートでした。旧制高校にさえ入っていれば、東大は医学部と法学部以外はだいたい自由に入れた。中野重治は金沢の四高で卒業までに五年かかったけれども、卒業すればそのまま東大の独文科に入っていることが『歌のわかれ』というかれの最初の長編に描かれています。希望者の多い医学部と法学部——とくに法学部は岸信介だとか佐藤栄作だとかというたぐいの者にもなり易いということがあるから、(笑)旧制高校生が殺到する。ところが長くこの法政の漢文・中国古典の教授だった長澤規矩也先生は、おれは東大で一番だったというので、ほんとうですかと聞いたら、ほんとうだと言っていばっていました。あとでわかったのは、彼の入った東洋哲学科は学生が一人しかいなかったんです。(爆笑)ひどいじゃないですか、といったら、そんなところに志望する学生がたくさんいると思ったのか、というのが答えでした。いや、国立大学では、学科によってはある年そこに入る学生がまったくいないのがあって、学生がいなくても教師に給料はくれるのですから、こんないいところはないともいえます。まあ、大学というところは、それなりに実いろいろなことのあるところなのですが、話をもとに戻しましょう。

いつまでも片岡さんというわけではありませんが、中学二年のときに一年間教室で教わってからずっと先生の家へ遊びに行くようになりまして。いま考えてみると、片岡さんは姫路以来旧制高校生と

しか付き合いがなくて、中学二年生が遊びにくるのが面白かったのでしょう。かれらはなにを考えているのだろう、という興味があったのでしよう。とにかく歓迎してくれたし、相手をしてくれるので、私はそのうちに綴方みたいなものを持っていつて見てもらうようになり、さらに短歌をも見てもらいました。そのころ私は歌人だった、という滑稽ですが、割合にまずくない歌を作っていたんです。(笑)その一部は「東京府立高等学校校友雑誌」に載っているのですが、中等部の二年生のときに載った歌を教授の山宮允さんがたいへんにほめてくれました。山宮さんというひとは、のちに法政の英文の教授にもなりましたが、もともとは芥川龍之介らと『新思潮』をやったひとで、ブレイクの研究者、日本近代詩史の研究者として知られていました。そのひとにほめられたのだから、そうひどい歌ではなかったと思うのですが、プロレタリア文学との邂逅、学生運動への参加ということでした。片岡さんに添削してもらいました。それから、片岡さんは釣りが唯一の趣味で、よく鶴見川などに息子の懋さん——いま駒澤大学の教授になっていきます——を連れてゆくの、君も一緒に来ないかというので、私もお供をしたりしていた。そのうちには息子さんの英語をみてくれと頼まれて、しばらく家庭教師をやった。あとで必ず晩めしを出してくれるので、片岡さん一家と晩めしをとるのが半年以上も続きました。そんなふうな関係になったのですから、やがて左翼運動に入ってから先生の家にはいつも出入りしていました。ほかにも進歩派の学生のかなりの数が片岡さんをしたってよく訪ねてきていました。あるときわたしは、

共産党系の学生運動のための会合の部屋をさがすのに困って、片岡さんの二階を借りにゆき、片岡さんは何もいわずに貸してくれることになりました。これをめぐって目黒署でわたしを追及されたこと、そのとき同じ留置場に学生だった武田泰淳がいたことなどについては『すばる』の「私の見た昭和と思想と文学の五十年」にややくわしく書いたのでここでは略しますが、片岡さんも何回か目黒署に通わされただけでつかまりはしなかったものの、左翼学生とのことでトラブルが起こったということで詰め腹を切られるようなかたちで府立高校を辞めなければならなかった。

そうしたら、法政大学にいる近藤忠義先生——さきほど言った藤村作さんの娘さんと結婚したひとですが、このひと自身が上野の音楽学校いまの芸大を、左翼事件で追われ、それを藤村さんが法政に椅子をつくってくれて、昭和八年から法政の教授になり、学力からしておのずと日本文学科の中心になりました。まもなく彼は、府立高校を辞めた片岡良一をボンと法政に招き、法政の国文科——いまの日本文学科です——を、当時歴史社会学派といわれた進歩的国文学の牙城にすることに努めたんです。片岡さんは近藤さんのフリーチエ主義ふう・マルクス主義社会学派ふうの立場とはちがう、まあすぐれたデモクライトというようなひとでしたが、歴史社会学派とはもともと協力的でした。

私は七五日つかまっていたあと、府立高校を論旨退学になりました。二十八年後に私は、その府立高校が都立大学になってからですが、大学院の講師になりました。そのときに、かつてクビを切った者を講師として迎えるという都立大の雅量に敬意を表するとともに

に、(笑)のちに招くような人間をなんで昭和八年に簡単に首切ってしまったのかという点は恨みが残る、ということを行いました。(笑)私は法政で学生の首を切らないために奮闘してきました。いまは首切りはあまりなくなりましたが、戦後なにかという学生処分ということがあって、時には大量の学生の首を切ることがおこなわれましたが、法政の文学部では首切りを絶対に出すまいとして頑張りました。それは私だけが頑張ったわけではないが、まあ私がつともよく頑張りました。人間というものは、教育の場では長い射程で見なければならぬ。警察みたいに、悪いことをやったからすぐ処分するというようなやり方でなく、その人間の生涯を見わたすような長い射程で見なければいけないという、そういう立場をつらぬいてきています。

いや、この調子でお話しているとキリがありません。急ぐことにします。(笑)まだ昭和八、九年ですね。遅れてプロレタリア文学の読者になり、中野重治・宮本百合子・小林多喜二などに打ち込むようになりましたが、なにせ旧制高校の一年生のときにクビになったのだから、どこかの学校へ入らなければならぬ。国立・公立の高校・大学は文部省からこの種の者を入れてはならないというお達しがあるために入れず、二年ほどほとぼりを冷ましたあと、片岡さんと近藤さんのいる法政以外にはないということで法政を志願し、その予科(旧制高校にあたる)の試験を受けて入りました。

そのころ、さきほど佐々木基一の話にあったように、佐々木基一・荒正人・久保田正文たちを知り、その前後にまた平野謙・本多秋五たちを知る。とくに佐々木・荒の二人とは、その後八年間にわたつ

て毎週一回、六、七時間におよぶ猛烈な研究会をやりました。あれは私にとっての大学だったと思います。いま思うと、その後私程度のものがけっこうものを書いたりなどしていられるのはこれらの人をはじめとして法政の海老原光義・平岩八郎をふくむ多くの友人たちがいたことによるところが大きい。文学的にはとくに佐々木基一と荒正人、それから、平野謙とか本多秋五とか埴谷雄高とか山室静とか、そういう人たちがいたために、実にいろいろな点でずいぶん救われました。いい友人に恵まれるかどうかということが、その人の一生を決定する、ということをおぼえています。それから、そういうことがあります。このあいだ大阪で須藤和光という人のお葬式に出席しました。葬式といっても、ふつうの葬儀のかたちをやめて、「須藤和光とお別れをする会」というのが行われたのです。この須藤和光という人は、もう一人の中川隆永という人とともに昭和一五、六年ごろに関西で『流域』という同人を出していた文学青年だった。彼らの送ってくる雑誌の内容は、最近復刻された『現代文学』などに私たちが書いていたことと相通じるものがあり、しだいに文通するようになりました。戦後、蓋が開いてみたら京都を中心に野間宏や下村正夫や、そのほかいろいろな青年がいて、私らとほぼおなじようなことを考えていた。ブリュッゲルの絵にうちこんだことまで——佐々木基一から画集を借りて私や荒が熱心に見ていた、あのブリュッゲルの絵にかれらもうちこんでいたことがわかった。それから、福岡には大西巨人がいた。そういうことは戦後にわかってきたのです。敗戦前にはまったくわかりませんでした。それぞれが孤立していたのです。

須藤和光と中川隆永とは、戦前に同人雑誌を通じて知り合い、私らはほとんどおなじスタートラインに立っていた。そして、かなり似た力を示していた人たちです。ところが、昭和一六年ごろのあるときからプツンと消息が絶えました。消息が絶えたときはつかまつた時だ、と考えるのがふつうでしたから、彼らはやられたのじゃないかと思っていました。案の定、やられていました。そして敗戦後しばらくして、ようやく出獄する。ずっと獄中生活だったんです。後年、裁判記録を読みましたが、彼らのやったとされていることは、実はたいしたことではないのです。ひどかった東京でも、これくらいならすぐ出される、という程度のことを、大阪では文学関係者が少ないものだから、重く扱われたのでした。彼らは戦後しばらくしてようやく釈放され、ひととき療養しなければ活動することもできないという状態だった。それで彼らは戦後の出発が非常に遅れ、そのうえ日常生活に困ったということもあって、多少はものは書きましたが、地方でのすぐれた文学的組織者という以上に文学上のその能力を存分に発揮することができないということが続いた。その人柄・能力については、いまでも多くの人が信頼をし敬意をもっていたことが、死んだときに、その「お別れをする会」に行ってくわかりましたけれども、しかし彼らの能力が十分に広く認められるには至りませんでした。私はこの「お別れをする会」に出ている、ああ、私が大阪にいたら、ああだったかもしれない、というふうに思いました。私は東京にいて、友人たちや編集者たちに恵まれ、自分の力がある程度出すことができた。三文役者でも檜舞台におし出されると、なんとかして一人前の俳優みたいになるまわなければなら

らない、そのときに、なんとかうまくふるまえば格好がつくが、ふるまえなければ脱落する。私はそのときに脱落するほどではなかったのだと思います。とにかく、そういうところへ出る機会を作ってもらって、一人前にふるまうということをやってみて、それをかさねて多少とも伸びてくるのができたのだらうと思います。

そういう点では、人の運命というものはまったくわかりませんけれども、私は片岡先生に出会ったこと、多くの友人たちに出会ったこと、その他いくつか、ということが決定的だったようで、その他ということのなかには、もう一人、近藤忠義先生とのめぐり合いということがあります。その日本文学科に私は入ったのですが、若いころから進歩的だった近藤先生については尽きないいろいろな話があります。しかし、亡くなったときのことから申しますと、先生は、戦後の最初から没年まで熱心な共産党員でしたが、共産党から憎まれるようになってしまった私との個人的な師弟関係には、少しの変化もなかった。先生の葬式の際には、葬儀委員の永積安明さんや広末保さんたちに頼まれて、私が法政での近藤先生のお弟子全部と、緊急なので私がとりあえず大学そのものと、文学部教授会とを代表して多少くわしい弔辞を述べるといふことになりました。私はまる一日かかってやっと夜中に弔辞を書きあげたら、葬儀委員から電話がかかってきた。

近藤先生の息子さんは共産党の本部に勤めていて、なにか情報を『文春』に流したとかで党の査問中、それで、その査問中の者が父親の葬儀に、共産党の嫌う小田切の弔辞をもらったとあっては非常にぐあいが悪いから、どうしても拒絶したいと頑張っているので困っ

ているところで、そのあげくだが、とにかく明日の弔辞はやめてもらう以外にないということになってしまったのだが、と葬儀委員が言う。あなたたちが困っているのはよくわかった、まあ、いいでしょう、ということ、私は葬儀の日に参列はしたが力作の弔辞は机のひきだしのなかに入ったままになりました。だから、そのときの葬儀にはお弟子代表からの弔辞もないし、文学部教授会からの弔辞もないし、法政大学からの弔辞もない。そういうことが生じたのでした。

しかし、ここに至るまでの近藤先生とのいろいろなこと——たとえば、私は学生時代に近藤先生の『西鶴』という本の歴史社会学派的な弱点にたいする批判を『古典研究』という雑誌に書いておそるおそる先生にさし出したら、やがておとがめを蒙る代わりにかえて先生に認められるようになったというようなことがありました。が、そういうことの一つ一つをお話していたらまったく切りがありません。私に与えられた時間もだぶ超過しました。

それ以来ずっと今日に至るまで、いろいろな問題がいっぱいありました。私は研究者・批評家のはしくれとしていくらかの仕事をしてきたわけですが、同時にそのどれにも重い悔いがあることはいうまでもありません。たとえば、きょうたまたま『文学時標』という小さな新聞、敗戦直後にわたしたちが出していたもので、こんど復刻いたしますが、その『文学時標』を見ていたら、昭和二年の三月一日号で、すでに転向の問題について、これはわれわれの心の痛みにおいて掘り下げなければならぬ、ということを強く主張している。その一月一日号からは文学者の戦争責任の追及をはじめても

いて、すべてにす早かったのです。文学における主体の問題とか、自我の問題とか、とにかくいろいろな問題の提起が早いのです。しかし、それを突き詰めていって一つの大きな仕事にまとめるということ、私は少しもやっていない。批評家として提出したさまざまな問題、ときには広く論議になりながら、それを提出した私がそれとことんまで追い詰めてゆくということをやっていない。そして次々と新しい主題に移ってしまう。こういう経過をいまかえり見ると、なんでこんなに移り気だったのだろうかといまになって思います。一つの問題と次の問題とはつながっているのだとしても、その一つの問題をどこまでも追うということをしませんでした。これは、これから少しでも補っていくより仕方がないというふうにいま考えます。

そのほかにも、いろいろありますが、時間がなくなりましたので、最後に、私が一番望んでいることはなにかということをお願いします。これは、このまえ大学院の学生諸君と合宿したときにこういう問題を出して、一人一人自分のそれを言ってほしいと言ったら、みな困ってそれぞれに何とか返事をしました。しかし、私はそれがはつきり言えるのです。それは、前から考えていたことです。文学においての人間的な理想や要求はつねにネガティブなかたちで表現される、つまり、こうであっては困るといふかたちで文学は描いているのですが、これをもしポジティブなかたちで考えてゆくと、どうなるだろう。

私は、それを「人間の顔をした社会主義」という、ドブチェクの言葉を借りて言いたいと思います。あるいはレーニンが名著「国家と革命」に書いた革命の理想だといってもいい。レーニンのこのす

ばらしい本にはなお弱点があちこちにあります。もっと展開しなければいけない、非スターリン主義の方式をつくりだして展開しなければならぬところがいくつもある。ドブチェクの主張にも現在では展開の必要なところがいろいろある。しかし、これらのものには現れているところの人間の顔をした社会主義というものが、その実現をみることは、まずあるまいという、そういう絶望の気持ちが一方にあります。しかし、この地上のどこかに、そういうものが実現するであろうこと、そのいとぐちをでも見ること、それを私の終生の望みとしている。文学の、こうあってはならないというネガティブなかたちで提出しているところの人間的な理想や要求というものの、もっとも突き詰められたものとして、そういうものが実現されることを、いつも望んでやまない。

しかし、そのためには自分の力はもうどれほどでもないし、長くやってきたことだつて実らなかつたことが多い。いまあらためて自分の力でそれを創り出すことができるとも思えませんから、やがてだれかが実現してくれることを待つ、ということ公然と表明しそのために私も協力をする、というふうにしたい。日本で最初に実現することはむづかしいかもしれない、しかしそれを望む人は出てきてもらいたいし、そういうひとたちはいると思っています。そういう人を手伝いたいというふうに思います。

もう、とつくに時間が過ぎていくというのに中途半端で申しわけありませんが、一応これで終わらせていただきます。(拍手)